

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

138

特集 チェルノブイリが語るもの

CONTENTS

チェルノブイリが語るもの / 2024年秋 福島訪問レポート (2) /
飯館村の冬 / ベラルーシ訪問再開のお知らせ /
リサイクル募金しゃぼんのお礼とご案内 / コラム ミンスクの日 /
総会報告 / 支援者のお名前とメッセージ / 事務所移転のお知らせ



新石棺遠景

撮影：中筋純 撮影年月：2013年2月 撮影場所：プリピャチ市

プリピャチ市の集合住宅屋上からチェルノブイリ原発を遠望。石棺をカバーするドーム型の構造物は作業員の被曝を避けるため、石棺から300メートル離れた場所で建設中だった。



オンライン版への
アクセスはこちらから

* 環境負荷軽減および経費削減のため
ペーパーレス化を進めています。

本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行

記号 17460 番号 52319621

他の金融機関からは 七四八支店 (普) 5231962

楽天銀行

ジャズ支店 (支店番号201) (普) 7017104

住信SBIネット銀行

法人第一支店 (支店番号106) (普) 1030416

※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

特別
寄稿

チェルノブイリが語るもの

中筋純

民俗学者の宮本常一は初めての場所を
フィールドワークするときには小高い丘に
登って調査の場を俯瞰することから始めた
という。

山や平地、河川や海が織りなす地形、それ
らと隣接する街や農地といった人の営み、そ
して吹く風の向きや匂いまで、俯瞰すること
で得られる人と土地との関わりの情報はたく
さんあるはずだ。

私は写真家である。

実は写真家も高い撮影場所を探す習性があ
る。写真は光を封じ込める表現だ。その場所
の光を読み、放たれる色彩を感じるために俯
瞰する。そしてその光に覆われる気配を感じ
るために。

「太ったものは脂を欲しがる

〜近代の難破船〜」

その気配を全身で感じたのが、今をさること
17年前、2007年の秋に訪問したチェルノブ
イリ30キロゾーンだった。事故から21年間、無
人と化したかつての原発城下町、プリピャチの
街を彷徨った。通訳、ドライバー、ガイド兼監
視役のウクライナ人の大男たちと、窓ガラスに
ひびが入り、しばし黒煙を吹く今にも壊れそう
な旧ソ連製LADAに乗り、かつてのユートピ
ア都市の亡骸を彷徨った。

プリピャチでの行動は厳しく管理されている
のだが、ここはウクライナ流にクリブナ（ウク
ライナの通貨）を握った手で握手さえすれば、
監視役の目は見えなかったことになる。そうし
て崩落危険のため立ち入り制限がされている街
外れの16階高層アパートの土埃と瓦礫が堆積し
た階段を息せき登り屋上に出た。

そう、きっとこの場所がプリピャチの街を、
そしてチェルノブイリ原発事故を俯瞰できる場
所になるだろう。その予感的中した。

季節は10月下旬。あと2週間もすれば北極圏
から伝たい風が吹き始め、長い冬が始まるとい
う季節。事故前は整然と植えられたという街路
樹のポプラは剪定されることもなく奔放に枝葉



を伸ばし、またその実生があたり一面に子孫を繁榮させ黄金色に輝いている。それは冬を迎える前の一瞬の光。街の亡骸の間隙から放たれる眩いばかりの光の先には、チェルノブイリ原発の建屋が遠望できる。その姿はまるで光の海を漂流する難破船のようだ。

私は、商業写真家として生計を立ててきたが、それと並行して日本国内の様々な産業遺構を撮影してきた。産業遺構には人の営みの様々な時間が封印されている。それらは戦争やエネルギー革命、はたまたバブル経済といった時代の流れが幾重にも重なった時間の層でもある。その層が差し込む自然の光により解き放たれる瞬間、すなわち封印された時が放つ気配のようなものを写し込んできた。

ただ、眼前に広がる光景からはいつもと違う



pripxyachi_2

気配を感じた。時間の層の厚さが全く違うのだ。「時代」で括られるような断片的なものではない。約3億8500万年の進化の歴史をもつ植物（種子植物）群が、たかだか700万年の歴史しかない我々人類が築き上げてきた文明、その佳境とも言える「近代」を飲み込みまんとする姿。そしてその先の漂流する「近代」の難破船には地球創生の記憶を有する核物質の残骸が静かに眠っている。この光景は地球46億年の時間の層かもしれない。

「太ったものは脂を欲しがる。」

わざわざ三脚持ちに階上まで同行してきたドライバーのセルゲイが原発建屋を指差してふと呟いた。ウクライナではよく食されるサロ（豚の脂身の塩漬け）をたくさん食べて太った人間は無限にサロを食べたくなる。転じて「足るを知る」という意味の諺らしい。

膨張する近代文明は人間の欲の膨張と歩調を並べ、宇宙誕生の膨大なエネルギーを手中に収めようとした。だがその結果、行き着いた姿が眼前にある。かつては原発で働いていたものの、30キロゾーンに隣接した小さな村で家族と



pripxyachi_6

暮らす彼は、家族がいて小さな畑があつて、森で猟をして川で魚が釣ればそれで十分だという。東京に比べ随分と控えめな首都キーウの街明かりでさえ彼にとってはまぶしすぎると。

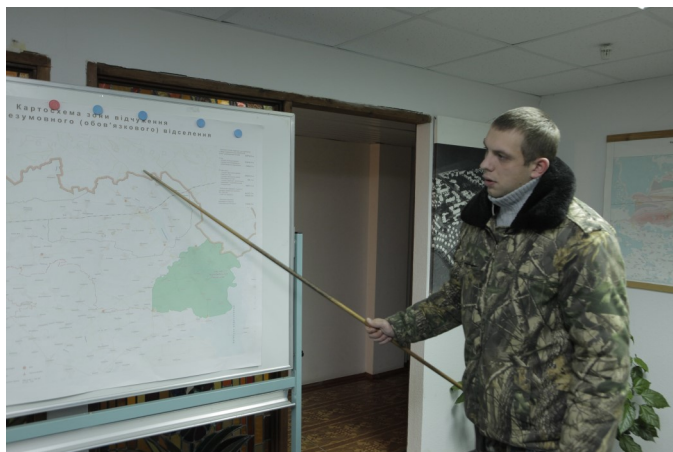
発電所の入り口に掲げられた、プロメテウスを表現した大きな彫刻作品が西日に赤く輝く。果たしてこの難破船の行く末はどうなるのだろうか？ 我々はまだ脂を求め続けるのだろうか？ 光に覆われたその光景の奥深くに感じる気配、そこに滔々と流れる時間の層をあぶり出すために季節を変え何度もチェルノブイリに通うことになったのはいうまでもない。

地下に眠る証言者

チェルノブイリの立ち入り禁止ゾーンを訪問するには、入域許可証はもちろんのこと随行ガ



sennrixyou_sokutei



gaido_kaisetsu



shokudou_WBC



shokudou_WBC_2

イドと称した監視役が必要だ。彼らはゾーン内の放射能汚染に関して知識が豊富で、訪問者は彼らからの入域のガイダンスを受ける。ガイダンスは原発事故により放射能がどのように拡散しフォールアウトしたかを地図を用いての解説に始まって、放射能の基本知識、またそれを防御するための手洗い、不用意に草地に入るな、土やコケを踏むな、飲食排便をするな、などゾーン内での禁止事項など多岐にわたっている。

私が写真家だとわかると、膝をついたり寝そべって写真を撮るのはご遠慮いただきたい、撮

影後の三脚は足の先端部を拭くように、とかなり厳しい口調。実際、ゾーン内30キロや10キロに設けられた検問所では表面汚染を測定する測定機器を通過しなければ域外に出ることはできないし、チェルノブイリ市内を始め発電所付属の食堂も入り口に測定機器が設置されている。ウクライナといえばその辺はもっと雑なイメージがあったのだが、

「それは、あなたの命のためです！」

ガイダンスはそのセリフで締めくくられた。

事故発生から二十年以上経過しているものの、放射能汚染はまだまだ健在のようで、チェルノブイリ市から発電所に近づくにつれ、道路の両脇のなんの変哲も無い草地に警告標識が増え、線量計のアラーム音の小刻みさも増してくる。

事故直後、大量のフォールアウトで植林された松が赤く枯れたことから名付けられた、通称「赤い森」を通過する時は、線量計の刻みに同調するかのように車の速度は上がっていった。

「まだまだ放射能の問題は解決していません！」

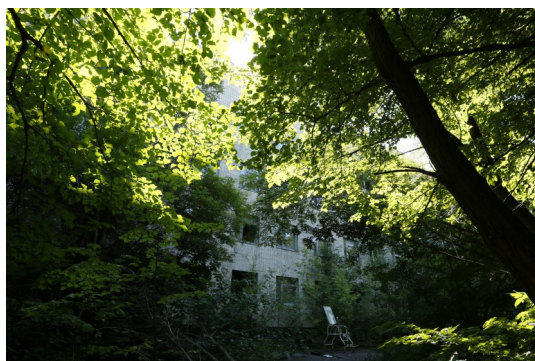


sennrixyou_sokutei_2

彼らの言う通りプリピャチを始め周辺の村々を訪ねている時も、線量計は手放せない。汚染瓦礫撤去に使い無造作に放置された重機のカニ爪、同じく汚染瓦礫や枯れた木々の埋葬地など、ホットスポットの「名所」となっている場所もあれば、市内墓地の撮影時には新たなホットスポットが見つかり管理事務所に報告することもあった。

「病院の地下室のどこかに原発事故火災の消火にあたった消防士の衣装が放置されていると言う噂があります。一緒にリサーチしませんか？」

ゾーン訪問も回を重ねると現地スタッフと気心も知れてくる。4度目の訪問時、老齢のガイド、ニコライからこんな提案があった。



bixyouin_gaikan



chikashitsu_4

訊けば事故処理に当たった原発所属、プリピャチ市、チェルノブイリ市の消防隊員が急性放射線障害でプリピャチ市の中央病院に搬送。衣装の表面汚染が酷く、脱がせた衣装一式を地下室の物置に放置したと言う噂がある。ガイドはそろそろ退役するので最後に噂の真偽を確かめておきたいと言うことだ。

消火活動で命を落とした30名の消防士の話は、チェルノブイリ事故の悲劇として有名な話ではあるが、彼らの遺品が今も地下室に放置されているとは衝撃的な話であった。無理もない、事故翌日にプリピャチ市は全市民が強制避難になったのだから、。

放置された病院は鬱蒼とした森の中にあり、

3階建ての建物は数ブロックに分かれた複雑な構造になっている。地下室へ向かう階段は無数にあり、崩れ落ちた壁、破れた窓から舞い込んだ長年の落ち葉の層、そこに雨水が溜まりぬかるみ、魔窟への入り口のような。階下はもちろん光もささず、懐中電灯の明かりだけが頼り。我々はあてもなくさまよった。

3箇所目の階段を降り始めた時、線量計の警告音のピッチのインターバルが短くなってきた。ひよっとしたらここかも知れない。階下に入り暗い廊下をおぼつかなく歩き地面を照らすと、ヘルメット、靴、消防で使うノズルのような器機が散乱し、やがてどん突きと思われる小部屋を照らした瞬間、その部屋の床一面に衣装が散乱していた。事故後、誰かが侵入したかどうかは定かではないが、この散乱具合から当時の混乱の様相が如実に伝わってくる。そして、この衣装を着ていた消防士が落命し、今はモスクワの墓地で鉛の棺で眠っていると考えると、私の両手はカメラを構える前に思わず合掌せざるを得なかった。落ちていた靴に線量計を近づけると、今までに数値は一気に跳ね上



chikashitsu_2

がり、1332 $\mu\text{Sv/h}$ という今までに見たことがない数値が暗闇の中に浮かび上がる。

後日、キーウの国立チェルノブイリ博物館アンナ・コロレフスカ副館長のご紹介で1名の消防士に会うことができた。病院地下室の様子をはじめ落ちていた衣装はじめ残留物の画像をお見せすると、

「これはまちがいなく我々が着ていた衣装です。火災現場に突入するときの『戦闘服』と呼ばれていたものです。あの時私も発電所の屋

上で消火活動に当たっていました。火災の高温で屋上に塗られていたコールタールが溶け出し足が沈んでいくのです。無我夢中でした。でも、しばらくして気を失って、気がついたらモスクワの病院にいました。私は一命をとりとめたのですが、同じく消火活動をしていた兄は命を落しました。無念ではありません。」

散乱した「戦闘服」、靴底から放たれる高線量の放射線、、病院地下室の様相は、事故当時の混乱と、失われた人命、そしていまだに消えることのない放射線、すなわち原子力災害の恐怖を克明に伝える証言者なのだろう。

生きるということ

LADAはサスペンションを歪ませながら森の中の道を走る。大木が屋根を貫いた廃屋、森の中で苔むす独ソ戦戦勝記念碑、添えられた造花がまだ新しい墓地、朽ち果てたバス停、そして教会、、。車窓からはかつての村の営みが伺える。チェルノブイリ立入禁止区域にあったのは、原発城下町だけではない。遙か昔からポレーシエと呼ばれるドニエプル川の支流、プリピャチ川の低湿地帯には大小様々な村があった。原発事故発生後、この村々の住民も随時避



難の対象となり、原発から30キロ圏は鉄条で囲まれることになった。

車はやがて森をくぐり抜け小さな草原に出る。あちらこちらの小さな家の煙突からは煙が出て、畑には作物が実り、井戸の脇には新しいバケツがかけてある。電柱の上に巣を作ったコウノトリのカップルが異邦人の来訪を見つめているようだ。私たちは、油、石鹸、チーズやサーロを手土産にこの村に住むご老人宅を訪ねた。

サマシヨール。

ウクライナ語で勝手気ままな、自由奔放な人と言う本来の意味は、政府の立ち入り禁止命令に背いて我が故郷の村での生活を選択した人たちのことの総称だ。木造の平屋の可愛い家の周りには立派な花壇があり、季節の花が咲くのだろう。畑には旬の野菜がたわなに実っている。まるでおとぎ話の世界のようだ。

「ようこそいらっしゃい！」

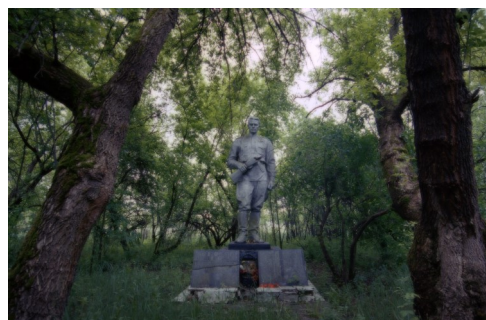
陽気な声で我々を出迎えてくれたのはハンナ婆さん。空色のスカートに真っ白なシャツとプラトック（頭に巻く布）はまるでウクライナの空のようだ。家の中はペチカを中心に壁一面に家族の写真が飾られ、電化製品といえば小さな

テレビと冷蔵庫があるくらい。挨拶もそこそこに早速振舞われた自家製蒸留酒のサマゴンで杯を交わしながら身の上話を伺う。訊けば原発事故の後、避難先の生活に馴染めなくて帰村した当時は140人ほどの村人がいたそうだが、今は8人になってしまった。男衆がいないので薪割りなどの力仕事は福祉関係の職員や森林警備隊がやってくれるのだとか。隣の友人も病気がちだしこの先どうなるか心配だ、。子供達はキーウに帰ってこいと言うが、大きな街は窮屈でね、畑もできないし、。

婆さんは手招きして、世界一美味しいものを食わせるから外にこいと言う。連れて行かれた畑には旬のキュウリが鈴なりだ。これを食べ！と



kounotori





mura_7

もがれたキュウリは小ぶりだがみずみずしさの中にしつかりとした味がある。隣には収穫期を迎えたジャガイモの畝が連なる。今年はコロラド羽虫に葉を食われたのだが、まずまずの出来だと言う。ばあさんの年輪が刻まれた太い10本の指が土に突き刺さり、黒土をかき回したかと思えば両手にいつぱいのジャガイモが姿を現した。

「これで冬は越せるな！」

婆さんは天を仰いで微笑んだ。

彼女たちの暮らしは、家畜を飼い、堆肥を作り、畑を耕し、森で木の実やキノコ、薪を取

り、皆の井戸で水を汲む。家を照らすわずかな明かりと、暖をもたらすペチカ、そしてその灰は畑に戻る。全ての営みに共有と循環の概念が存在している。日本にも古来から身土不二と言う言葉があるが、まさにその言葉そのままの暮らしがここチェルノブイリ立入禁止区域で営まれていることに驚いた。我々近代を生きる人間が忘れてしまった最も大切なものがサマシヨールの村にある。

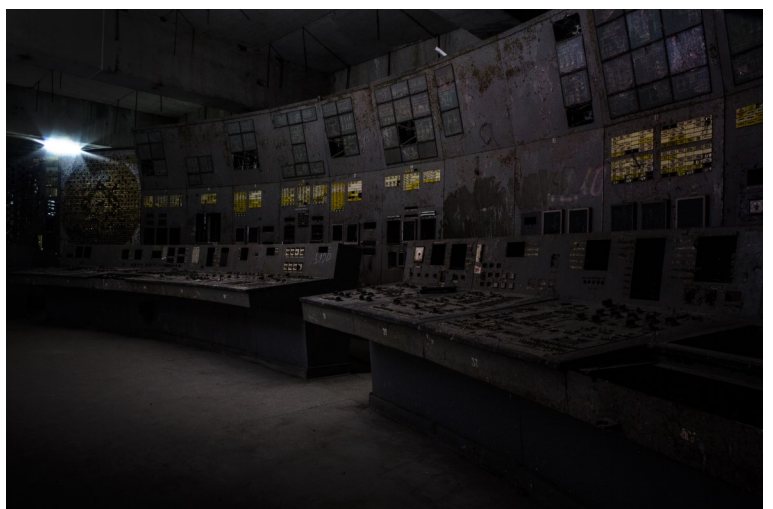
彼らは間違いなく必要以上の「脂」求めない「痩せた」大地の人なのだろう。

そのわずか20キロ北には今もなお解決の道筋が定かではない原子力発電所の亡骸、そしてその瓦礫の暗部に眠る溶け落ちた核燃料がある。

膝を屈した近代と、中世を思わせる牧歌的な暮らしを自然とこなす大地の人。我々はどちらの生き様を礎にこれからの未来を築いていくのだろうか？ チェルノブイリ30キロゾーンという空間は、我々に生きるとは何かということをは問かける教示的な場所である。

「貴方も私も墓の下」

2014年、マイダン革命が吹き荒れる2月



4gouki_naibu

に建設中だったチェルノブイリ4号機新石棺の内部撮影が許可された。事故後の高線量の放射線が飛び交う中で、多数の人命を危険に晒しながら突貫工事で建設された旧石棺は、損傷がひどく崩落の危険もあり、それを巨大なかまぼこ型ドームで覆ってしまおうという計画だ。資金はヨーロッパ復興開発銀行を始め日本も拠出し、事業はフランスのノバルカ社という合弁会社が請け負った一大プロジェクトだ。建設従事者の被曝を避けるために、旧石棺から約300



メートルほど西側に離れた場所で2本のレールに乗せた状態でドームを建設。完成後油圧でドームをスライドさせ旧石棺と合体させ封印するという前代未聞のプロジェクトだ。撮影当時ドームは3分の2ほど完成し、何機もの大型クレーンで部材が吊り上げられ、湾曲した天井では米粒ほどに見える作業員が命綱頼りで作業している。

案内してくださった広報官の話では、ドーム内部は特殊な亜鉛メッキが貼られ、放射線によるドーム本体の金属疲労、および外部への放射線漏洩を最大限に低減し、耐用は100年を試算しているとのこと。ただ、肝心の旧石棺の解体と、内部の瓦礫撤去、そして本丸の「象の足」と呼ばれる核燃料デブリの処理に話が及ぶと、雲行きが怪しくなる。

「まずはあと30年旧石棺の管理をしながら放射線の低減を待ちます。そのあと40年ほどかけて瓦礫の撤去、そして可能であればデブリに着手、いやもつとかかるかもしれませんね、」

「30プラス40で70年。デブリの取り出しが難航してドームの耐用100年を過ぎればどうするのですか？ 新新石棺でカバーする？」

しばしの沈黙の後広報官は自信ありげにこう語った。

「一つだけはっきりしている答えがあります。それは、100年後は貴方も私も墓の下にいる、ということです」

現時点での我々の持ちうる知見が我々の生命がこれから100年持たないということだけは確証されており、ことデブリの処理に関しては全くの未知数だという、ある意味的を得た回答に思わず頷いてしまった。

原発事故というのは、地球の歴史が辿った時間と向き合うことだと改めて認識した瞬間だった。

「そして 福島は今」

2007年から2014年まで6度にわたる

チェ

5gouki_1



ルノブイリ取材の間に、東日本大震災が発生し福島第一原発は国際評価尺度で同じランクの事故を起こしてしまった。撮影旅行の目的はそれを機に大きく変化したことは言うまでもない。

初めて見たチェルノブイリのカタストロフィをどうやって原発が林立する日本で共有するか？ 現地の状況を記録し写真撮影の最終行為である「見せる」を遂行し、8000キロ離れた異国の現在進行中の「リアル」が遠い記憶の中の「リアリティ」がある存在でないことを知ってもらいたかった。だが、2011年後の撮影は、果たしてこの先福島は、そして日本の行く末を「検証」する視線が入ってきた。

2012年からは福島の被災現地にも撮影に

出かけ、チェルノブイリと福島を行き来することになった。住民は強制避難させられ流浪し、無人と化した街はやがて自然に覆われるようになり、イノシシなど野生動物が闊歩。数年後には初期被曝による甲状腺癌が発生し、25年と8000キロを隔てた原発事故起因の共時性を感じた。

だが、我が国で復興政策が本格化し始めた2013年頃から向かう方向が徐々に変わってきたようだ。被災地の除染、避難住民の帰還政策、賠償金の打ち切り、原発事故と甲状腺癌の因果関係不認定など、チェルノブイリ事故の混乱の中から編み出した数々の政策とは真逆の政策が推し進められ現在に至っている。

原発至近の被災地は元の住民が一時帰宅で戻ると道に迷うくらいに、除染という名目の家屋解体が行われ、かつての街並みは全てバラスで鎮圧されてしまった。そこに流れ込む膨大な復興資金は、原発産業崩壊後の新しい「明るい未来」を喧伝するための新たな箱物の建設に流れ、先代が眠る墓所をかき回し

墓石を切り刻み廃棄し芝生を張り公園を造り、鎮魂と防災の学びの場である震災遺構の小学校の隣接地にパークゴルフ場を造り、かつての名産であった梨の広大な農園を伐採整地し莫大な電力を消費するAIのためのデータセンターを作る有様だ。

アーカイブ施設として建設された伝承施設のエントランスに記された、福島原発をめぐる年表は、なぜか施設の開館日で途絶えている。未だ0.7gのデブリらしきものが取り出せた段階の廃炉作業の現実を見ると、年表は無限に広がっていく余白があってもいいものだが、「明るい未来」のためには、これから起こりうる未知数なものは予測しないことにして福島原発事故はすでに歴史の段階に入っていると云わんばかりの空気を感ずる。

一方、チェルノブイリ原発事故関連の資料を展示しているウクライナ国立チェルノブイリ博物館は、消滅した村々の境界標識を「花道」にメイン展示室に誘導され、原子炉の内部をイメージした空間には決死隊で臨んだ防護服を着たリクビダートル（事故処理人）のマネキンが立ち、壁一面に健康被害を受けた子供達の写真が張り巡らされている。



pripxyachi_1



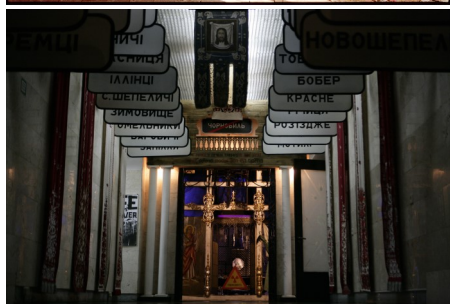
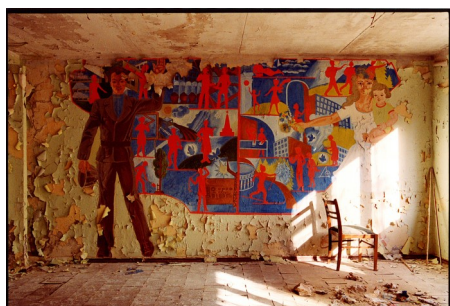
cherunobuiiri_city_kouen

博物館のアンナ・コロレフスカ副館長はこう
いう

「大切なことは何が起こったのかを見つめること
です。未来はそれから探すのです。そのため
に伝えることが大切です」

そう考えればチェルノブイリの立ち入り禁止
地域は当初は被曝回避のための措置だったかも
しれないが、手付かずだったことが幸いして、
結果、現在では原発事故を知らない世界中の
人々へ原発事故のカタストロフを伝える巨大な
伝承施設となっているとも言える。来訪者は自
然に飲み込まれるプリピアチのアパート群、そ
こに封印されているソ連邦という時代の空気、
そして不気味な光を放ちつつ原野に立つ新石棺
とその内部で未だに人を寄せ付けない巨大なデ
ブリ。来訪者が見えるものを俯瞰し、見えざる
ものを心の中で咀嚼し、近代に生きる我々が目
指すための本当の「明るい未来」の端緒を掴む
きっかけを作ってくれているはずだ。

写真家という表現者として何ができるの
か?? 先ほどのアンナ館長の哲学に倣い、意
を同じくする仲間たちと福島県南相馬市に一昨



● おれたちの伝承館 ●

979-2122 福島県南相馬市小高区南町2-23

Mail :2021moyai@gmail.com

HP :https://suzyj1966.wixsite.com/moyai

(開館日情報はこちら)



年夏もう一つの伝承施設を作り上げた。震災と
原発事故のアートによる伝承施設「おれたちの
伝承館」だ。14年前のカタストロフに直面した
各作家の揺れ動く心情が込められた作品群は、
来訪者に原発事故の、そして近代に暮らすこと
の意味を深く問いかけ、深い思索に導く役割を
果たしている。

答えのない廃炉作業、先行きが不透明な被
災地の未来、喫緊なるエネルギー問題、作
品を通じて来訪者たちが本当の「明るい未来」
を話し合えればと思っている。それが未来世代
への大切な伝承となるはずだ。

2024年秋福島訪問レポート(2)

篠田菜々香(大学4年生)

私は今回が初めての福島訪問でした。今までは通信を読んだり、ニュースを見たりする程度でした。それでも、自分としては意欲的に活動出来ていると思っていました。今回も、大学四年でこれから就職するにあたって、あまり遠出は出来ないことを考え、未だ放射線量が多い場所にいくつか行ってみたいと思つての参加でした。しかし、実際に訪問してみると、私の中にはまだ他人事のように思つていた部分があつたと気づきました。それと共に、まだ知らなかったことばかりで衝撃を受けました。

例えば、車含む屋内に入れば放射能は届かな



【写真1】車内の線量計

い、と、誰に聞いたわけでもなく、ただ漠然とそう思っていました。確かに屋外にいるよりは放射線量も少なくなるとは思います。しかしながら、移動中に通りがかった山道で、その日の天気が悪かつたこともあり、少し放射線量が高いとされているところを車で通りがかっただけで、瞬く間に線量計の数値が上がっていきました。放射線は目に見えないので、普通に通つていれば全く分からないというところに恐怖を感じました。

一日目は浪江町と双葉町に行きました。請戸漁港、請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館に訪れました。

請戸漁港では、福岡の海と同じくらい普通の海で、水遊びをしようかと思いました。しかし、何十個も未だ残っている黒いフレコンバッグが並ぶ砂浜や、分かる人が見たら分かる処理水が放出されている海を見て、一気に現実引き戻された感覚を感じました。

請戸小学校では、凄惨な現実を感じました。

写真を撮るのも忘れて、電気が垂れ下がった天井や大きく凹んだ床を目に焼き付けるように歩いていました。二階には動画資料や、原発が出来る時の新聞等が飾られていました。ここですったのが、一階と二階の教室の破損具合です。一階の教室は海側に面していたということもあり、見るからにボロボロでした。しかし、二階は階段の手すりが一部新しく変わっていた程度で、資料館として使う為に補強などはされているとは思いますが、ほとんど綺麗なままでした。二階は廊下が海側に面しているということだったので、ここまで露骨に変わるかと思いましたが、そして、新聞記事を一通り拝読したのですが、ネットがあまり普及していない時代なのに、新聞記事では『原発は絶対に爆発しない』という風に記載されていました。今読んでみると、『原発安全神話』の火付け役のような気がしました。その頃には景品表示法があつたようですが。この辺りはもう少し考察してみなければいけないと思いました。

伝承館では、第一原発の二号機の爆発を阻止した管や、津波によって拉げたパトカーがありました。この時に黒い袋がフレコンバックだと知りました。請戸漁港には伝承館に行く前にも

後にも訪れることが出来、フレコンバックを知ると、より厳しい現実が分かりました。

二日目は双葉町の双葉駅周辺へ行きました。大量の虫に震え上がった記憶が強いのですが、前回の訪問にも同行していた方からは『以前はいなかったから生命が感じられて良くなった』と言われました。そんな捉え方もあるのか、と思いました。確かに、周囲の建物が取り壊されたり、雑草が大量だったり、当時のまま取り残されたような街だと感じていました。

双葉町は最近避難解除されたところで、まだ人気はあまりありません。当時の写真で見る風景よりも建物が減り、雑草が伸びていました。原発が出来るような近代的な街でも、人がいなくなったらあつという間に自然に戻っていくのかと思いました。

今でこそ、原発の差し止め請求などの裁判がありますが、その当時は新聞で主な質問が取り上げられた程度でした。希望に満ち溢れていた街が、人気の無い寂しい場所になるのは悲しいなと思いました。

三日目は飯館村で伊藤延由さんの話を伺いました。実は、四泊五日の福島訪問中で、一番印

象深かったのが三日目です。

伊藤さんのお話を伺った場所の近くにある山はまだ除染がされておらず、触れないように気を付けながら線量計を近づけただけで、瞬く間に数値が上がっていききました。伊藤さんから、飯館村の震災当時の軌跡、キノコなどの線量計の記録、裁判のことなど、他では聞けない話も沢山耳にすることが出来ました。

飯館村では、地震や津波の被害はほとんどなく、より被害の大きかった近隣の村からの避難民なども受け入れていたそうです。しかし、四日後の三月十五日に放射能の被害が発覚し、十六日には訳も分からず脱出するしかなかった、という話を伺いました。そのため、飯館村は『三・一一ではなく、三・一五』とのことでした。一日目、二日目で知った『原発安全神話』から、まさか原子力発電所が爆発して、まさか放射能という目に見えない物から、家も土地も捨てて逃げなければならなくなるとは、夢にも思わなかっただろうと思いました。

伊藤さんの話では、特にキノコについて、とても興味深い話を耳にすることが出来ました。

放射性物質は届く範囲全土に降りますが、特に森林に降った場合は、土壌に養分が少なく、放射性セシウムを吸いやすい状況にあります。そのため、放射性物質が残りがよくなっています。それに加えて、キノコには放射性物質を取り込んで濃縮し、化学エネルギーを発するので、とりわけ放射線量が高いのです。

キノコの放射線量を記した表を拝見しましたが、その表には規則性がありませんでした。規則性の発見を試み、目を凝らしもしてみました。値が全くと見つけることができませんでした。数値が減ったと思えば、翌日は急に数値が跳ね上がった、という記録が多々見受けられました。放射線量は天候が悪いと、雨が木を伝って

【写真2】
表の見方

【表の見方】	↑キノコ名 (かつこは飯館村での呼び名)
	▶キノコのセシウム濃度 ※赤字は食品基準 (100ベクレル) 超
	▶生育土の セシウム濃度
	▶採取地の放射線量

	↑コウタケ (イノハナダケ)
	▶1万1710 (ベクレル/キログラム)
	▶2万7540 (ベクレル/キログラム)
	▶0.85 (マイクロシーベルト/時)

【写真3】コウタケのセシウム含有量

土壌に染みこむことによって、その土壌を成育地とするキノコの線量が高くなる、という流れがあります。気候に左右されている、というのがこの不規則な記録の原因かもしれません。

伊藤さんの話の中で最も興味深かったのが、キノコの塩漬けについてです。キノコを塩漬けにして、それを塩味がなくなるまで水に晒して塩抜きすることにより、百パーセント近い放射線物質が除去されていたのです。

しかしながら、この塩抜きにはデメリットもあります。

今年の 実測データ	処理前の セシウム量 (ベクレル)	塩抜き後の セシウム量 (ベクレル)	除去率
アサクラシメジ	7431	8.6	99.88%
ムラサキシメジ	3074	0.5	99.98%
コウタケ	796	0.6	99.92%
アマタケ	4111	22.4	99.46%
モミタケ	1151	1.8	99.84%
ニンギョウタケ	174	1.4	99.20%

【写真4】塩抜き前後の線量比較

キノコには食感だけでなく、味や香りを楽しむキノコが存在します。コウタケという、マツタケと同等かそれ以上の香り高いキノコがあります。飯館村では手のひらサイズで生えているキノコなのですが、キノコは前述の通り放射線量が高いものも多いです。しかし、塩漬けにすれば、百パーセント近いセシウムが除去できました。しかし、コウタケ（香茸）の香りがなくなってしまうです。これがデメリットとして挙げられます。

キノコを塩漬けにすることは革新的な方法かもしれませんがキノコが持つ香りは唯一無二の為、味や食感だけでなく、香りが持ち味なキノコにはこの方法は適していないと言わざるを得ません。

放射性物質は半減期が長いものもあります。特に、セシウム137の半減期は三十年であり、無くなるまで待つには遠すぎることもあります。

塩漬けというところで思い出すのが、フグの解毒です。フグは有毒部位を塩と糠で数年漬けて解毒するというもので、まだ詳しくは証明されていない古来からの方法だそうです。先人の知恵なども借りつつ、植物が本来持つ良さを生

かせる方法があればいいなと思いました。

四日目は、鈴木亮さんの案内の元、いろいろな町へ訪れました。その中で印象深いのは請戸漁港近くの見晴台、檜葉町の宝鏡寺にあるヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館です。

請戸漁港の見晴台では、津波の最高到達点がありました。見晴台も十メートルあるのに、津波はそれよりも高いとありました。あまり高い所は苦手ではないのですが、トタン材の台から見下ろすと怖いくらいでした。

宝鏡寺の境内にある伝承館では、和尚が集めた原子力に関する事故の記録がたくさん残されていました。上にあるお面は地震の際に傾いた時のままで、たまたまだとは思いますが、般若



【写真5】見晴台より

などの険しい表情をしたお面ばかり傾いていたのが印象的でした。

五日目は写真家の中筋純さんの案内のもと、浪江町大堀や、大熊町へ行きました。

大堀では、倒壊したままの家や、中の物がそのままになっている建物がありました。手を伸ばせば届きそうなのに、まだ鉄の門で閉ざされたままで入れないという状況が印象的でした。

今回は新しく出来た商業施設など、福島の変化を多く見ることが出来ました。時代が移り変わっていく中でも、風化させないように皆の心の中において、語り継いでいくことが大切なんだということが分かりました。

人よりも原発事故のことに触れた一人として、人に伝えていこうと思います。



【写真6】倒壊した家

福島訪問を振り返って

福岡大学4年 古賀伊織

私は今回で福島県への訪問は3回目となりました。3回目ともなると、地名に詳しくなり、見慣れた場所もできましたが、それでも福島の変化は目まぐるしく来る度に新たな発見が得られます。前回訪れた場所も、様子がかなり変化していました。被災地には新しく、立派な施設が次々と建設されています。私の地元よりも発展しているように見えますが、人が全く歩いていない様子は何度見ても異様な光景だと感じています。

双葉駅は今回で3度目の訪問となります。最初に訪れた際は、避難指示が解除されてから



↑双葉駅と町役場。
伝承館への送迎バスが停まっていた。
あまり人の気配を感じなかった。



↑元々商店街があった場所。
面影は全く無い。

およそ1年ほどしか経っていなかったということもあってか、駅の周辺に建物も無く、駐輪所には震災時に止められていた自転車がそのまま置かれていました。

今回の訪問の際には駐輪されていた震災時の自転車がすべて片付けられました。また、周辺には新しくコインランドリーができており、人が住んでいることを実感しました。駅東側には2025年に開業予定の商業施設の建設が始まっていました。

双葉駅同様、今回訪れた大熊町の大野駅周辺も再開発が進んでおり、こちらにも大型複合施設などの建設が予定されています。かつての大野駅周辺には地元の方に愛される商店街がありましたが、震災後にお店は全て解体され、今は

更地となっています。変わりゆく故郷の姿をかつて大野駅の商店街で生活していた人々はどう受け止めているのか。私には利用する人が果たしているのかも分からない新しい立派な建物を、次々に建てるのが復興だとは考えられず、現段階では疑問に思います。

変わった場所も多くありますが、前回の訪問から変わっていない場所もあります。前回訪れた浪江町の大堀は、震災時に被災した建物が多くあり、空間線量も他の地域に比べるとかなり高かったのですが、今回の訪問ではそれらに特に変化を感じませんでした。

大堀で一番印象に残ったのは更地となっていた大堀小学校です。大堀は陶芸が有名な地域で、大堀小学校でも授業で焼き物を制作しており、小学校には焼き物用の大きな釜がありました。原発事故が起きていなかったら訪れた時間帯は子どもたちの声で賑やかな場所だったのかと思うと、やるせない気持ちになります。校庭には校歌にも登場する大きな柿の木がそのまま残っています。柿の木は震災前と変わらず小学校を見守っているように見えました。

今年の元旦に起きた能登半島の震災の際に私がまず考えたことは、元旦に地震が来るのか、



大堀小学校

校舎は解体されている。
静かで寂しい場所に感じた。

でした。災害はいつ自分の身に降りかかるのか分からないことを改めて実感しました。福島で原発事故によって被災した人の中にはまさか自分の家に帰るのが10年以上先になるなんて思ってもいなかった人もいるでしょう。もし今大きな地震と津波が発生して、一番近くの原発で事故が発生した場合どうすればいいのか、分からない人が大多数であるだろうと思われる現状で原発を動かすことは本当に正しいのか、私は福島への訪問や能登での震災を受けてとてもそうは考えられません。最近では南海トラフ地震臨時情報が発表されるなど、日本全体で震災に対する備えを勧める動きとなっているように感じます。しかし、原発事故が起きた際にどうするか、という情報は全く目に入りません。福島原発事故が風化されているように感じると同時

に原発事故へ対する脅威が薄れているようにも感じます。

福島へ訪問する度に福島其自然豊かな景色や美味しい食べ物などに魅力を感じ、今では思い入れのある場所になりました。だからこそ、この美しい自然が放射能で覆われ、食べ物が風評被害を受けている現状は悲しく、悔しく思います。私でさえこのような感情を抱いているので被災された方はそれ以上にとっても言葉で言いあらわせない気持ちを抱いてるでしょう。だからこそ同じ思いを抱く人がこれから先いらないように原発事故の被害については伝承する必要がありますがあると私は考えています。また、被災された方の存在や思いも決して風化させてはならないと思います。伝承館で語り部をしている方が自分の被災した経験を語ると風評加害者、だと言

郡山海岸での写真

バリケードの先は帰還困難区域であり、立ち入ることは出来ない。ここをずっとまっすぐ行くと、福島第一原子力発電所にたどり着く。



われることがあると語っていました。福島はもう復興した、としたい人はそう言うでしょう。でも実際に震災後に戻ってきた人は少数で、避難指示が解除されていない場所がまだある現状で復興しているとはとても考えられません。福島の復興はまだ終わっていないこと、原発事故の被害を受けた地域の再生の厳しさは伝えていく必要があると私は3回の福島訪問を通してそう考えています。

4日目は、前号の通信にご寄稿してくださいった鈴木亮さんに福島県の様々な場所を訪れました。訪れた場所で印象に残った場所を紹介します。

浪江町 最初は浪江町の津島地区を訪れました。津島地区は、震災後に全域が帰還困難区域となっていました。昨年3月に一部地域の避難指示が解除されました。それに伴い住民の帰還、居住に向けた除染とインフラ整備が進められています。私達が訪れた津島小学校は除染作業の活動拠点となっており、作業員の方がいました。近くにはスクリーニング場もありました。

双葉町 次に訪れた双葉町には、毎回訪れる建設中の復興祈念公園があります。建設現場には

仮設展望台ができていて、初めて上から公園を見ました。地上から見るとよりも公園の広大さを感じる事が出来ましたが、完成予想図にはまだ遠いように感じました。また近くには新しく大きく立派な橋も建設されていることもあり、公園の完成は果たしていつになるのかが気になります。

富岡町 りふるん福島（特定廃棄物埋立情報館）を訪れました。その後道路沿いにある放射性廃棄物最終処分場建設反対の看板を見ました。看板には故郷を守りたいという訴えを感じました。放射性廃棄物は中間貯蔵施設のように県外に持ち出すか、それとも福島県内にとどめておくべきか、いずれはどちらかを決定せざるを得ませんが、決定に反対する人がいたこと、その人々の意見や思いは決して忘れてはならないと思います。



↑ 祈念公園の
仮設展望台より



↑ 海の向こうに第二原子力発電所が見える。

楢葉町 最後は宝鏡寺にある伝言館を訪れました。伝言館には福島原発事故だけでなく、ビキニ環礁核実験や広島・長崎への原爆投下等に関する資料もありました。資料を通し、改めて原子力の脅威を感じました。「原子力明るい未来のエネルギー」という標語が震災前に飾られていた道も今回訪れました。今後原子力に対する脅威が無くなると、こういった標語が一般的になる社会がまた訪れるかもしれません。これでは同じことの繰り返しとなります。そうならないためにも原子力・原発事故による被害は風化させないよう、次世代へと語り継いでいく必要があるのです。

芹田博さんの報告書は
ウェブ版に掲載しています。





出会いに感謝しながら 6度目の福島訪問!!



通算6度目となった福島訪問
(2024.9.8～9.12)でみたこと、
かんじたことを、写真と文章で
お伝えします。

今回の訪問で撮影した写真は、
こちらからご覧いただけます。



▲ 米の全量全袋検査(模型)【双葉町】

東日本大震災・原子力災害伝承館は県立の施設ですが、館内に米の全量全袋検査の模型がありました。2012年度から2020年度まで、出荷される福島県産の全ての米は、検査が行われていました。その際に使用された検査の全体像が、模型を使って展示されていました。



▲ 商店街を写真で再生【浪江町】

津波の影響で以前の姿をみる事ができない浪江町の商店街ですが、津波以前の写真を撮影した写真家・中筋さんによって、同じ場所で比較しながらみることができました。写真は5メートル以上ある特製の写真で、以前の風景が甦ってくるようでした。



▲民間資料の宝庫「伝言館」訪問【楮葉町】

「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ 伝言館」は、原発事故の教訓を伝える民間の資料館です。創設した故早川住職の宝鏡寺境内にあります。富岡町在住の鈴木亮さんにアテンドしてもらいました。館内には、広島や長崎、ビキニ環礁で起きた原爆被害や水爆実験で被曝した第五福竜丸に関する資料などが豊富です。



▲ドローンからみた巨大ソーラーパネル群【浪江町】

浪江町に広がる農地を利用した巨大ソーラーパネルですが、今回ドローンを飛ばして空中からのリアル動画でみることができました。上空からみたパネル群は、圧巻でした！

同行者プロフィール



せりたひろし
広告デザイナー

NPOやNGO、社会福祉協議会など非営利組織の広報ツール製作を多く手掛ける。最近では広報研修や講座の講師も精力的に務める。

現在、京都芸術大学通信教育部デザイン科イラストレーションコース在学中。

写真もイラストももっと上手くなりたいですねー！



公式インスタ



📷 同行してみて

初めて福島を訪問した際には、6度も何うとは想像もしていませんでした。毎回思うことですが、私たちが見聞きすることはほんとに一部分であって、これで福島のことを全部わかったということは、ありえないと思います。

また今回新たな出会いがあり、今後に繋がる出会いとなりそうです。その出会いのひとつが、今回の宿泊先だった富岡町の民宿「ふきのとう」さん。夫婦で関東より移住されたのこと。こうした繋がりによって、少しずつですが「福島の今を知る」ができていくのだと思います。改めて感謝。

【参考サイト】
東京新聞社



福島 だより 飯舘村の冬

1. 飯舘村

飯舘村の冬は長く寒い、標高が400m〜500mで隣の川俣町や海岸沿いの南相馬市よりも5℃以上低い気温です。

雪は少なく15cmから20cm程度の降雪量ですが気温が低く道路凍結が被害をもたらしました。

隣町からのルートはどちらから来ても急峻な坂の昇り降りを伴いますから。

2. 2014年の大雪

そんな小雪の村も2014年の2月は大雪でした、2月7日に70cmほどの降雪があり14日にまだ70cmの降雪でした。

1m以上の積雪で、当時は全村非難の最中でした、村で作業していたのですが避難先に戻れず、5日間閉じ込められました（全村非難でしたが、日中の出入りは自由、宿泊が禁じられていました）。

写真は、村の除雪が間に合わず自前で除雪しました。1mを超える積雪は2010年に設置したビニールハウスを倒壊しました。

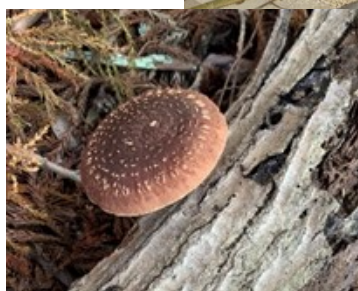
3. 豊かな自然の恵み

飯舘村は農業と林業が主要産業でした。4月〜10月は農業、11月〜3月は林業を営んでいました。

林業の主な商品は椎茸、ナメコの原木生産とパルプ用のチップ材生産でした、福島県は原木の生産高では日本一でした。

私の師匠である目黒明さん（故人）は農作業が終わると原木生産に励んでいました。

私も2010年の農閑期に100本の原木を求



めて椎茸の駒うち（椎茸菌のついた駒を原木に打ち込む）して近くの杉林に寝せて椎茸の生産を夢見ていました。

管理人をしていた「いいたてふぁーむ」のメニューに原木椎茸の炭火焼を加える予定でした、100本の原木から収穫できる椎茸は食べきれないので、乾燥椎茸をお土産になどと夢は広がっていたのです。

2年後に収穫した椎茸は約3,000Bq/k



gの汚染が検出されました。

たまたま、現在係争中の原発被害の損害賠償訴訟の現地進行協議（裁判官の現地視察）の際

（2024年5月29日）に14年を経て朽ちかけた原木に椎茸が出ていました、測定結果は約760Bq/kgの汚染でした。これが自然の恵みの実態であり原発事故の実像です。

4. 冬の飯舘村の生活

極寒の飯舘村の生活は隣近所での相互交流が頻繁でした。

お隣さんと言っても回覧板を配るのに軽トラで行く距離ですが、各家庭自慢の漬物を持ち寄ってお茶飲みが頻繁に行われていました。

村に来て1年ほどの私も用があつて顔を出すと“よらっせ”、“あがらっせ”、“お茶のまつせ”と仲間に混ぜられて時を過ごすことができました。

厳寒の冬は路地栽培の野菜は無く、食卓を賑わすのは自然の恵みでした、春先に採取したワラビやフキなどの塩漬けたものを塩出しして食べていました。

猪鼻茸（香茸）は乾燥保存して祝い事などの時に食卓を賑わしていたのです。

5. どぶろくの話

私が入村した時には、どぶろく特区を取得した方が営業していましたが、かつては村独特のどぶろく文化があり、ひそかに密造して飲んでましたようでした（私が幼少期を過ごした新潟県の田舎にもあった）。

お亡くなりになりましたが、菅野栄子さんから聞いた話です、栄子さんが小学生の頃（80年くらい前）、各家庭には電話が無く、唯一学校には電話があったそうです、その電話の利用例です。

当時もどぶろく密造は酒税法違反でたまに税務署の査察があつた時です、“査察が入った”と情報が入ると、急遽学校が授業中止して帰宅し、ろとそして家族に“鬼が来た”と伝えろと、それは隠語でどぶろくを隠せだった。

6. 蜜蜂のお余り

村では日本蜜蜂の蜂蜜生産が盛んでした、蜂蜜も自然の恵みでした。

多くの家庭の庭先に巣箱が設置されており、1月頃には8〜10kgの蜂蜜が獲れ、末端価格

にして10万円ほどになりました。

蜂の巣を増やすのは、5月の暖かい日に分蜂します（巣別れ・巣箱に新しい女王バチが誕生すると古い女王バチが一部の働きバチ伴って出ていく）、その際に捕獲して新しい巣箱に移します。

新しい巣箱に定住してもらうのは大変で、しっかりとハウスクリーニングをし蜜蝋などを塗布して気に入ってもらおうよう努力します。

蜂蜜は良い値段で取引されていましたが、蜂蜜を絞ったカスは廃棄されていましたが、それをもらい受けて蜜蝋の生産にトライしました。

蜜蝋生産には湯せんのための熱源が必要で冬の作業でした、薪ストーブを使い何回か湯せんし



樹の幹に集合した分蜂した蜜蜂の一団



プロフィール
伊藤 延由
(いとう のぶよし)

1943年 11月生まれ
2010年 飯舘村の農業研修所
「いいたてふぁーむ」
の管理人に就く
管理人の傍ら、水田・畑を耕作
2011年 2年目の準備を目前に被災
6月末福島市内へ避難
11月「飯舘村新天地を求める会」
を立ち上げ活動



蜜蝋を絞ります、あまり湯せんを繰り返すと香りが薄くなるので蜜の綺麗さと香りを残す事に注意が必要でした。
飯舘村はいつの時期も自然の恵みが豊かな村でした。



ベラルーシ訪問再開のお知らせ

これまでベラルーシへの渡航を見合わせていましたが、6年ぶりに訪問を再開することとなりました。

詳しい報告は6月発行のチェルノブイリ通信139号に掲載予定です。

日程 : 2025年4月7日(月)～4月22日(火)

訪問先 : ミンスク、ゴメリ、
ブレスト(移動検診チームに同行)

1986年4月26日に発生したチェルノブイリ通信原子力発電所事故から39年。いまだに発症する甲状腺がん患者。もしかすると未来の福島なのかもしれません。

私たちは現地での最新の状況を2019年に贈呈した「雪だるま3号」に同乗して調査して来ます。患者さんと会って会話ができてのが楽しみです。(川原秀之)



リサイクル募金
きしゃぽん

ご支援・ご協力をありがとうございます！

読み終えた本やCDなどで募金ができる「リサイクル募金きしゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。

≪ これまでにお寄せいただいた寄付額 ≫

◇◇ 1,406,355円 ◇◇

(475名)

募金の方法や取扱品目は
ウェブサイトをご覧ください





2025新年を迎えたミンスク、
現地からお祝いの様子をお届けします。

年末から街中に出現するクリスマスツリーの壮大さと美しいイルミネーションには圧倒されます。人々の会話も、それぞれ家のもみの木の飾りつけ準備等お祭りモード一色になります。

年末年始は、学校、大学、職場の友達同士でも時間を見つけて街に繰り出し、ショッピングや美味しい食事でエンジョイします。

また、お世話になった人や親しい相手にハッピーニューイヤー・クリスマスプレゼントを贈る伝統はとても大事に守られてきており、お金があっても足りなくても、心のこもった贈りものをお互いにする習慣が幼い時からあります。自分が語学を教えている学生や生徒からもらった中には、食べ物・スイーツ、実用的な食器、基礎化粧品、自筆の手紙・絵などがあり、その気持ちのこもったプレゼントにとても胸が熱くなります。こちらからも受けとる相手の喜ぶ顔を思い浮かべて何か工夫したお返しがしたくなり、お祭り気分が盛り上がっていきます。

大晦日の夜～新年の朝までの過ごし方について若い世代の彼ら(中学生～大学生)にきいてみると、ほとんどが自分の家族(両親や兄弟と、または祖父母や友人の一家も交えて)と0時のカウントダウンを数えた答え、その時食卓にあったのは、みんな口を揃えたように「シャンパン」、「オリヴィエ・サラダ」、「ローストチキン」と言います。おそらくこの三つが定番のお祝いメニューなのでしょう。

ミンスクでは、新たな年がスタートした直後もこの祭典ムードは続きます。正教が主流で、そのクリスマスが1月7日で、イヴの6日夜中、もしくは翌朝に近所にある教会を訪れて一緒に祈禱します。そこでも、お互いに祝福の声・メッセージを掛け合い、プレゼント交換をしたり、家に戻った後は家族と食卓を囲んでゆっくりするなど、お正月と似た感じで過ごす祝日となっています。



広場のクリスマスツリー (提供写真)



クリスマス聖夜の教会

このように、新年とクリスマスは主に家族と過ごす特別な祝日で、その合間に親しい友人達と会ってお互いを祝福することとても大切です。この時期に重なる大変な仕事や学業の数々も、こういった楽しみが待っているからこそ、前向きにガンバれるんだと思います。そこには、かけがえのない幸せな時間が流れています。

過去のコラムや紙面の都合上
掲載できなかった写真は
ウェブサイトで公開中



2024年度 事業・決算報告

2月22日(土)に2025年度通常総会を開催し、前年度の事業報告・決算報告についての協議、承認がおこなわれましたので簡単にご報告いたします。

*詳しい総会資料は団体ホームページで公開しています。

2024年度事業報告

1)チェルノブイリ原発事故の被災者及び被災地に対する支援事業

■ベラルーシ訪問事業

- ・2024年9月にベラルーシ共和国を訪問予定だったが中止
- ・移動検診用超音波診断装置の購入資金(2台、計2万ドル)を送金予定

■被災者と障がい者による福祉工房「のぞみ21」支援事業

- ・活動支援、木工品やリネン製品の仕入れ、日本国内での販売

■ウクライナ難民支援

- ・獨協医科大学国際疫学研究室 福島分室 室長 木村真三先生が設立された「一般社団法人 ヒューマニタリアン・サポート」の募金受け入れは2022年11月30日で終了

2)日本国内での原子力災害などによる被災者及び被災地に対する支援事業

■東日本大震災の被災地訪問調査

- ・2024年3月10日(日)～3月15日(月)、9月8日(日)～9月12日(金)に福島県を訪問
- 2024年5月18日(土)、10月19日(土)に報告会を開催



3)被災地及び被災地の現状を周知するための普及啓発活動

■「チェルノブイリ通信」発行事業(年4回発行)

- ・発行時期:3、6、9、11月
- ・発送部数:1,450～1,721部(メール配信を除く)

■イベント企画・運営事業

- ・グリーンコープ生協組合員様を対象とした木村真三先生のオンライン講演会を計9回実施

■その他の情報発信事業

- ・団体ウェブサイト、SNSでの情報発信、イベント等での活動紹介
- *参加イベント
FUKU-NETパネル展、ラブ&ピースフェスタ



FUKU-NET
パネル展



ラブ&ピース
フェスタ

4)フェアトレード事業

■チェルノブイリ支援コーヒー、紅茶の販売

2024年度決算報告(2024年1月1日～2024年12月31日)

(単位：円)

科目	2024年度決算		
経常収益			
1. 受取会費			
正会員受取会費	36,000	36,000	
2. 受取寄付金			
活動支援金	5,537,019		
のぞみ21カンパ	62,000		
雪だるま3号カンパ	46,000		
震災支援カンパ	271,000		
あじさいの会カンパ	70,000	5,986,019	
3. 事業収益			
のぞみ21支援事業	1,600		
フェアトレード事業	462,910		
カレンダー販売事業	94,000	558,510	
4. 受取助成金等	0	0	
5. その他収益	328,206	328,206	
経常収益計			6,908,735
経常費用			
1. 事業費(*)			
訪ベラ事業	641		
のぞみ21支援事業	96,598		
震災支援事業	2,713,033		
会報発行事業	2,985,218		
イベント企画・運営事業	288,101		
その他の情報提供事業	30,745		
フェアトレード事業	430,088	6,632,627	
2. 管理費			
人件費	40,521		
その他経費	187,882	228,403	
経常費用計			6,861,030
当期経常増減額			47,705
税引前当期正味財産増減額			47,705
法人税、住民税及び事業税			71,000
当期正味財産増減額			-23,295
前期繰越正味財産額			26,753,800
次期繰越正味財産額			26,730,505

(*) 人件費を含めた金額です。また水道光熱費や支払地代家賃等の共通経費も按分されています。

2025年度の運営体制は次のとおりです。

理事長 : 寺嶋 可南子

副理事長 : 和田 幸策

理事 : 河上 雅夫、川原 秀之

事務局長 : 川原 秀之

監事 : 三島 さとこ

たくさんのご支援を
ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計

*活動支援金	385,650円
*のぞみ21カンパ	17,000円
*雪だるま3号カンパ	3,000円
*東日本支援カンパ	69,000円
*おまかせカンパ	3,000円
*福島訪問カレンダー	20,000円
*福島訪問の交通費一部	3,000円
*福島県産米10キロ	3,000円
*あじさいの会	6,000円

(2024年11月～2025年1月分の寄付内訳)

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工場のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあてさせていただきます。

※通信へのお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

●口座受付寄付

相川美智子 池永修 石川睦枝 榎本みつ枝 小野直子 国沢多恵子 佐藤久美 高嶋幸雄 田中直子 佃あけみ 長棟かおる 中村幸枝 西川弘美 野中孝子 引田良子 福井寿雄 古本募金きしゃぼん(運営:嵯峨野株式会社) 本田美穂子 松井岩美 三根麻理子 山田秀子 友愛幼稚園藤田房二 吉田久美子

〔都道府県別〕

【福島県】1名	【栃木県】1名	【東京都】1名
【富山県】1名	【長野県】1名	【静岡県】1名
【愛知県】1名	【兵庫県】1名	【鳥取県】2名
【島根県】2名	【広島県】3名	【山口県】3名
【愛媛県】2名	【福岡県】24名	【佐賀県】2名
【長崎県】2名	【熊本県】4名	【大分県】4名
【宮崎県】1名	【鹿児島県】3名	

計60名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリースポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川尻愛子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐々野也依 藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計108名(匿名含む)

事務所移転のお知らせ

チェルノブイリ医療支援ネットワークの事務所を移転することになりました。
新しい事務所の住所は以下の通りです。

福岡NPO共同事務所「びおとーぷ」

〒812-0011

福岡市博多区博多駅前3-6-1 小森ビル4A

お電話でのコーヒーの注文やお問い合わせは

9:00～16:00(月～金)とさせていただきます。

*留守にしている場合は折り返しお電話を差し上げます。

編集後記

4月に6年ぶりにベラールシへ渡航できそうです。現地の医療関係者からも再会を楽しみにしていると連絡がありました。移動検診の取材だけでなく、新しい超音波診断装置の寄贈に向けて具体的な打ち合わせ等も行いう予定です。(K・T)